



第67回日本化学療法学会総会
ランチョンセミナー 7

AMR時代に 求められる 感染症検査の方向性

— πコードを用いた多項目遺伝子診断法を含めて —

セミナー整理券について

配布場所：東京ドームホテルB1階「虹」前

配布時間：5月10日（金）8：00～11：40

数に限りがありますので予めご了承頂ければ幸いです。

*整理券はセミナー開始5分後に無効となりますのでご注意ください。

日時 2019

5/10 金

12:10 ~ 13:00

場所

第3会場

東京ドームホテル B1F
天空[サウス]

※整理券制とさせていただきます。

司会

賀来 満夫 先生

東北医科薬科大学医学部感染症学教授

演者

舘田 一博 先生

東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授

AMR時代に求められる感染症検査の方向性

－ π コードを用いた多項目遺伝子診断法を含めて－

東邦大学医学部微生物・感染症学講座教授

舘田 一博 先生

2016年4月に薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプラン 2016-2020 が発表された。これは、世界規模で進行する耐性菌問題に関して我が国が進むべき方向性を示し、果たすべき責任を明確に示した行動目標である。その内容は大きく6項目からなっており、それぞれに達成目標が示されていることが特徴である。(1) 普及啓発・教育、(2) 動向調査・監視、(3) 感染予防・管理、(4) 抗微生物剤の適正使用、(5) 創薬および新規診断法開発、(6) 国際協力の6項目すべてが耐性菌対策にとって必須の事項であり、1つでも欠けてしまえば達成が困難になることは明らかである。本アクションプランに掲げられた成果指標はかなり挑戦的である。黄色ブドウ球菌のメチシリン耐性率 20%以下、緑膿菌のカルバペネム耐性率 10%以下、経口抗菌薬使用量 50%減少 (2013 年比)、注射用抗菌薬使用量 20%減少 (2013 年比) などが提示されている。抗菌薬の適正使用を進めるためには迅速かつ正確な微生物検査が極めて重要であり、その結果として耐性菌の抑制が達成される。原因菌の特定から耐性因子、さらには病原因子の特定がますます重要になっている状況の中で多項目を同時に検査する診断法の開発が進行中である。 π コード多項目遺伝子検査はその1つであり、半導体製造技術を用いて目的の遺伝子を“バーコード”技術を用いて識別する画期的な技術である。本講演では、AMR 対策アクションプランの概要および現時点での達成度について概説し、 π コードを含め感染症検査における新技術をいくつかご紹介させていただく。